

第 6 回知的創造サイクル専門調査会

「国際標準総合戦略の検討課題」に関する意見書

平成 18 年 10 月 6 日

知的財産戦略本部員 野間口 有

「国際標準総合戦略の検討課題」は、取り組むべき課題が明らかになっており、基本的には良い案ではないかと存じます。9 月 21 日のサイクル専門調査会第 6 回にて意見を述べさせていただきましたが、補足を交えて以下に要点を記述させていただきます。

1. 国際標準化の具体的な戦略を

国際標準化に誰がどうやって取り組んだらよいのか、という具体的な戦略が明らかになっていないように思われます。例えば、これまでに標準化で成功した例を集め、今後標準化を行いたい企業などが参考にできるような事例を公表してはいかがでしょうか。

例えば、研究開発が進んで技術開発の成果が達成されつつある場合、技術を普及、進展させるという観点から国際標準化したいという案件が発生した際に、一企業ではどう動くべきか迷うことが多いと思います。このようなときに、研究開発の技術成果をうまく国際標準化した成功例があれば、自らがどう動いて標準化して行くかの道しるべとして参考になるはずです。標準化したいテーマによって企業が選択できるように、各方面からこれまでの標準化成功例を広く集めて公表してはいかがでしょうか。

2. 標準に関する議論について

議論されている中での論点で一言申し上げたいと思います。「会社内で標準をやっている人は評価されない」という点がとかく問題にされます。しかし、決してそうではないと思います。標準を担当している技術者はむしろ非常に恵まれていて、自分の専門技術を持って世界的な場で活躍しますから、技術者冥利に尽きるとも言えます。

同様に、「役員になった者はいない」という話がありますが、直に手を下して標準を担当しなくとも、標準を大変よく理解してその関連事業を大きく伸ばして役員になったという例はある程度多くあるのではないのでしょうか。これからの時代は国際標準が大事なのでしっかりやるべし、と言いながらリーダーシップを発揮することも重要です。このような場合も広い意味では、標準をやって経営者になったと言えるのではないで

しょうか。

さらに、以前から「標準化すると技術の進展が止まる」という意見があります。しかし、最近の情報通信関係（移動体通信、DVDなど）の標準化動向を見ても分かるように、標準化によって更に次世代の技術開発が盛んになり、新たな技術の進展がむしろ促進されるという面が大きいと思います。

世の中は大きく変革されつつあります。標準化に関する以前からの考え方ではなく、本質の問題はどこにあるのか、という観点から客観的に課題を見える化するように議論を進めてはいかがでしょうか。

3. 記載の仕方（細かい点ですが）

「経団連は、…すべきではないか。」という記述が多く出ていることが気になります。経団連、産業界、とまとめてしまうと、個々の企業の使命感、責任感が薄れがちで、とかく他人事になってしまうのではないかと思います。

「産業界は、経団連や各業界、各企業が…」という記述がよいのではないのでしょうか。

以上